足立納税貯蓄組合連合会　会長賞

「世界を支える『社会の経理』」

足立区立 千寿青葉中学校

三年　實川　光輝

月曜日の朝、学校に行こうと外に出ると、道路にはたくさんの穴があり、各家の前にはゴミ袋が散乱していて、とても車が通れるような道ではなかった。学校に着けば、「授業料の払った生徒のみ入校できます。」と書いてある看板が置いてあった。学校には入れず、家に帰り、手を洗おうとすると、いつものように綺麗な水ではなく、濁った水が流れてきた。何かがおかしいと思った。数日後、風邪を引き、病院で診てもらうと薬と一緒にいつもは貰わない請求書も貰った。こんな世界で私は安全で幸せに暮らせるのだろうか。勿論これは現実ではない。しかし、税金が無くなれば、この世界は空想では済まないのだ。

「税金」と聞くとどうしてもマイナスなイメージを持ってしまうと思う。それは、「奪われる」という印象を持っていたり、「なぜ税を取る必要があるのか」「どうしてこんなにもたくさんの種類を設ける必要があるのか」と疑問に思ったりするからだ。しかし、夏休み前に学校で受けた租税教室が私の考えを大きく変えるきっかけとなった。まず、税金は国や社会に取られるものではなく、生活に必要なサービスにみんなでお金を出し合うことだと知った。そこで私は、税金は何に使われているのか調べることにした。国税庁や財務省には、税金は「社会の経理」であり、主に教育、医療、交通などに使われている。中でも私が驚いたことは、それ

らは特別な人のためではなく、私自身の生活も支えているものだったことだ。学校へ通えること、安全な道路を歩けること、病院で安心して診察してもらえること、すべて税金が支えている。さらに税金にはたくさんの種類がある。私は最初、「なぜこんなに種類が多いのだろう」と疑問に思っていた。しかし、調べていくにつれ、それぞれの目的が異なるからこそ、必要な場所に公平に税金を届けることができるのだと分かった。また、徴税において大切なことは『公平さ』だということにも気付いた。

また、私は教会に通っているため、聖書にも税に関する記述があることを思い出した。新約聖書には、「租税人」と呼ばれる人たちが登場する。その中には、必要以上に徴税し、自分の懐を肥やす者もいたため、人々から嫌われていたという。しかし、そこで問題視されていたのは「税金自体」ではなく、税を集める人たちの姿勢などにあった。私はこれらの話から、税金は良し悪しではなく、「どう集められ、どう使われるか」が大切なのだと考えるようになった。

初めに想像した世界が現実にならないようにするためにも、税を納めるだけではなく、その使われ方にも関心を持つことが大切だと思う。最近では、消費税についても様々な意見があることをニュースなどで知った。それぞれに理由があるからこそ、社会について考え続けることが私たち一人ひとりの役目なのではないだろうか。